

アイダ・ターベル研究

— 調査報道の旗手 —

古賀純一郎

1. イントロダクション

i) 復讐の天使

残念と言うべきか、それとも、幸運というべきなのだろうか。この紀要にこれから何回かに分けて連載するアイダ・ミネルバ・ターベル (Ida Minerva Tarbell) は、日本ではほとんど知られていない米国の女性ジャーナリストである。著作の翻訳は、皆無であるし、その功績や生きざまなどを扱った論文もほとんどない。インターネット上の百科事典ウィキペディアに登場する程度であろうか。もっとも、これも英語版の翻訳の域を出ていない。

挙げるとすれば、切れ味鋭く、時には致命傷にまで及ぶアイダの筆の餌食となった著名人の伝記の中に登場することだろうか。

代表的なのは、創設した企業が今なお世界に隠然たるパワーを発揮し続け、当時、帝王として米石油業界を牛耳ったジョン・D・ロックフェラーの関連であろう。アイダは、その伝記や関連の書籍、世界の石油史に必ずと言っていいほど登場する。好敵手といったところか。

最近では、米国で1998年に出版されベストセラーとなったロックフェラー伝「Titan (巨人)」(Ron Chernow 著)の22章、「Avenging Angel (復讐の天使)」で取り上げられている。復讐心に燃えるアイダの一連の記事によって、構築した石油帝国が瀕死の重傷を被ったというストーリーである。⁽¹⁾

あるいは、1992年の米ピューリッツァ賞に輝いたDaniel Yerginの世界の石油産業史の名著「The Prize」でも取り上げられている。⁽²⁾ これも「Titan」と同様に、ロックフェラーとの絡みである。

ロン・チャウナウの「Titan」は、「タイタン—ロックフェラー帝国を作った男」のタイトルで日本経済新聞社から、ダニエル・ヤーギンの「The Prize」は、「石油の世紀—支配者たちの興亡」というタイトルで日本語訳が日本放送出版協会からそれぞれ刊行されている。片鱗を垣間見たければ、これらの本を参考にしていきたい。

いずれにせよ、国内で、既に、絶大な名声を博しているのであれば、私がこの論文でアイダを取り上げる必要性もなかったであろう。

では、本家本元の米国ではどうなのだろうか。活躍した時代が100年近く前であったというのにもかかわらず、アイダの残した功績はもちろん、その生きざまがあい変わらず取り上げられている。いささかの変化もないことに驚く。例えば、ニューヨークタイムズ紙が選んだ20世紀を代表する本の5位にアイダの本がランキングしている。1世紀の時空を超えて、一介のジャーナリストが、これほどまでの知名度を誇っているということは稀有なことではあるまいか。

日本では、同時期、つまり、明治時代末期から大正時代にかけて国内で活躍し、現在まで名を残しているジャーナリストは果しているであろうか。当時、随一の発行部数を記録したこともある萬朝報の創刊者、黒岩涙香（1862～1920年）が知られている。外国語に堪能で、欧州で人気のあった小説を、「鉄仮面」「ああ無情」「岩窟王」などのタイトルで、紙面に連載した。著作権がうるさくなかった頃の話である。政治家のスキャンダルなど暴露記事を数多く掲載するなどジャーナリズム界での功績も大きい。⁽³⁾ だが、その知名度は、必ずしも高くないし、著作もほとんど知られていないのが実情である。

アイダは対照的である。100年前の著作であるのにもかかわらず今なお一般の書籍の流通網で販売されている。ネット上の書店アマゾンを通じて注文ができる。これから披露する論文も、米国から取り寄せた原書がベースである。優れた業績を紹介するために創設されたホームページがあるのも嬉しい。出身大学のホームページは業績などにもかなりディープな情報が掲載されている。大いに参考にさせていただいた。

そういう意味では、比較するとしたら、10年前後するのだが、1867年に生まれた日本を代表する作家、夏目漱石あたりの方が分かりやすいかもしれない。朝日新聞社に籍を置いていたこともある漱石であれば、今でも書店で著作を見つけることは可能だし知名度も抜群である。そう考えると、アイダのイメージがより鮮明になるだろう。ただし、漱石はスキャンダルの報道とは無縁であるが。

ii) 巨大独占

多くの求婚を撥ねつけ、生涯を独身で通し、87歳で鬼籍入りしたアイダの手掛けた著作の分野は幅広い。女性の権利の研究のためフランスに渡った30歳前半のパリ在住時代、その関心は、当然のごとく1世紀前のフランス革命に及んだ。革命の真ただ中、ブルジョア系のジロンド派の黒幕、その女王ともいわれたロラン夫人の伝記を書きあげる。十分な蓄えもなしに渡仏したアイダは、米国の各種雑誌に記事を送付、生活費を捻出した。その関心は、欧州を制覇した皇帝ナポレオン・ボナパルトまで行き着くのである。⁽⁴⁾

帰国後は、奴隷解放で多大な功績のあった大統領のアブラハム・リンカーンに広がった。フランス時代の大作を含め、これらの著作は、大衆の人気をかつさらった。⁽⁵⁾

だが、それらを超える名高い功績を残しているのが、冒頭にも触れた当時の米経済界の巨人ロックフェラーの研究である。悪名高さを含めて、いい意味でも悪い意味でも巨人であった。

アイダの生きた20世紀初頭、ロックフェラーの創設したスタンダードオイルは、法律の盲点をかいくぐり、系列会社をトラスト（企業合同）という業態で束ね、事実上の巨大な独占体制を構築。当時の米石油産業を支配していた。⁽⁶⁾

南北戦争中に創業した前身のエクセルシア・ワークスは、ロックフェラーの類稀なる商才と才覚で、当時としては、最高に近い効率的な生産体制の構築に成功。市場支配のため企業買収を積極的に推進した。株式や資金などを提示し、傘下入りを勧め、応じない企業には、採算を度外視した価格競争を仕掛けた。闘いは、無慈悲、徹底的で、焦土作戦にまで持ち込みライバ

ルを粉碎した。

手荒い手法もいとわなかった。敵対する企業の息の根を止めるために、例えば、当時、唯一の大量輸送機関であった鉄道会社などに圧力を掛け、原料である原油のライバル企業への輸送を事実上、拒否させ、あるいはコスト高になるように仕向け、競争力で圧倒した。⁽⁷⁾

これによって、傘下入りを拒む企業を倒産に追い込み、当時の米石油市場の90%程度を支配する空前の巨大企業に育っていた。当時の最大、最強の独占企業といってよいだろう。売上高、利益とも巨額な石油帝国は、1890年代に入ると欧州などにも照準を定めて輸出を開始、さらなる膨張を続けた。

時代の女神も微笑んでいた。自動車時代の到来である。それまで照明・暖房用の灯油中心だった販売に、モータリゼーション入りで車の燃料であるガソリンが加わり、規模はさらに拡大、ディーゼルエンジンの発明で軽油、重油へも需要が広がった。

内燃機関の登場で石油の性格は一変する。戦略商品として基幹産業の中心に位置付けられるようになったのである。それは、頻発していた戦争の際に、戦況を決定的に左右する戦車、装甲車、戦闘機などが登場したことと関連がある。この燃料が石油製品であることを思い浮かべれば分かりやすいだろう。第2次大戦では、日本軍が「石油の一滴は、血の一滴」との標語を考案した。石油が戦争遂行に不可欠な戦略商品となったことを物語っている。

iii) 調査報道

アイダの関心は、ロックフェラーの経営手法の分析に尽きていた。なぜ、ここまで巨大化したのか、できたのか。どのような手法でライバル企業を倒し、破たんに追い込んだのか。あるいは、傘下に収め、ここまで発展できたのか。犯罪的、反社会的なやり方は皆無だったのか。ざっと言えば、こんなところだ。

アイダの取材は、あくまでも緻密だった。経営効率化を目指すスタンダードオイルは、市場の独占を目指し1882年にトラストを形成。企業合同は90年代に加速、州をまたいで構築されたトラストは、中流家庭や中小の企業家を脅かすシステムの乱用と映っていた。99年には、トラストは「全米が直面する大きな道徳的、社会的、政治的な闘い」だと位置づけられ、よく年の大統領選の重要な争点のひとつとなっていた。ことほど左様に、トラストへの風当たりは強かったし、スタンダードオイルに対して提起されていた裁判は少なくなかったのである。⁽⁸⁾

アイダは、これらの公判、公聴会での証言、新聞記事などの各種公開情報を丹念にかき集め、読破。その知識を土台に関係者はもちろん、完璧な秘密主義で厳重に統制されていたスタンダードオイルの本丸にも取材を敢行した。弟が経営陣入りしていた独立系の石油会社が完膚なきまでに叩きのめされており、業界関連の生の情報が入ってきたのも幸運だった。

取材は、現代のジャーナリズムでもてはやされる調査報道という手法である。官庁や企業などの公式発表に頼らず、自ら足を棒にして歩きまわり、情報を入手。取材対象、あるいは関係者らに果敢にアタックし、緻密な取材をベースに記事を書くやり方である。今日批判の強い記者クラブを根城にいわゆる官制情報そのリークに依存して記事を書く、いわゆる発表ジャーナ

リズム、建物ジャーナリズムとは対極に位置する。⁽⁹⁾

調査報道の金字塔として知られているのが、1970年代のウォーターゲート事件で当時の米大統領リチャード・ニクソンを任期途中の辞任にまで追い詰めたワシントンポスト紙の報道である。

ホワイトハウスの組織的な不正工作、虚偽説明、ねつ造、ごまかし、中傷、取材拒否などにめげず、同紙の2人の記者が関係者に対する丹念かつ長期にわたる取材に基づいて報道。当初は、「デタラメ」と完全否定していた政権を窮地に陥れ、最終的に、報道を事実と認め、政権は、自壊したのである。

iv) 罵詈雑言

アイダの記事は、社会派の雑誌「マクルアズ」に約2年間にわたって連載された。その内容は、辛辣を極めた。

創業からそれまでの発展の過程でスタンダードオイルが取ってきたライバル潰しの全容、言わば、トラストの恥部が白日の下にさらされたのである。あまりにも悪辣で、犯罪的、反社会的な企業経営の内情であった。この種の暴露は、初めて。度肝を抜かれるような空前絶後の内容だったから米政財界のみならず一般大衆は仰天した。

それまでも散発的な非難がロックフェラーに対して浴びせられていた。トラストがシステムの乱用との認識が社会に拡がっていたことは既に触れたが、この記事によってトラストのチャンピオンに対する一般の非難、罵詈雑言は、ピークに達したのである。

Daniel Yergin は、その時の反響を著書の中で、こう語っている。「アイダの最初の意図がどうであったにせよ、連載は爆弾と化し、全米で話題になった」「ある雑誌は『米国でこれまで書かれたこの種の本の中で最も注目に値する本』と激賞」「スタンダードオイル・ニュージャージーの歴史家でさえ、1950年代の後半になっても米ビジネスの歴史について書かれた本の中でおそらく一般大衆に幅広く購入され、内容が広く知れ渡った本である、と認めていた」。⁽¹⁰⁾

犯罪的ともいえる一企業の歴史を描いたこの記事の掲載で同誌の発行部数は倍増した。⁽¹¹⁾

その時の衝撃度というのは、一体どんなものだったのだろうか。比較にはならないだろうが、身近で分かり易いケースを挙げるとしたら、今から35年ほど前の、当時の首相、田中角栄の退陣への引き金となった立花隆による「田中角栄研究」(文芸春秋昭和49年11月号)のようなものと考えればよいのではあるまいか。

雪深い越後の片田舎から裸一貫で上京、首相まで上り詰めた田中の金権体質や土地を媒介とした錬金術などが微に入り細に入り、詳細に記述された。内情が暴露されたのは、初めてのことであった。売り出されると同時に大反響となり、掲載された「文芸春秋」の11月号はあっという間に書店から姿を消した。当時、学生だった私が新聞などでそれを知り、本屋に駆け付けた時には、既に入手は困難となっていたのを思い出す。

筆者が実際に田中角栄研究の原文を読んだのは、その3年後。その衝撃は、今でも鮮明に覚えている。まさに爆弾の炸裂であり、首相退陣の引き金になった理由が十分理解できた。

アイダの論文が、なぜ、これほどまでに当時の米国人の注目を集めたのだろうか。それは、既に指摘したように中小の業者を蹴散らし巨大化した伏魔殿トラストに対し 1890 年代から米国人が批判的になっていたことがあるだろう。さらには、トラストの活用で空前の独占企業に育ち、莫大な利益を上げていたこともあろう。潤沢な資金で、政界工作をスタート、裏で米政治家を操っていたことも既に知られていた。自社に有利な法案を議会で成立させる策動さえあったのである。圧倒的な力を持つトラストへの対応が 1900 年の大統領選のテーマの一つになったのはこうした背景もある。⁽¹²⁾

当時は、情報公開法もなくトラストの内部は一切ベールに包まれていた。企業の透明性の確保や説明責任をこれっぽちも感じていなかったのである。完璧主義者であるロックフェラーは秘密主義の貫徹をむしろ、よしとしていた。ほとんど知られることがなかった帝国の内情が詳細な形でアイダによって初めて明らかにされたのはまさにメガトン級のビッグな衝撃であった。だが、興味深いことにロックフェラーは、アイダの主張に反論もせず、沈黙を保ち続けたのである。

v) 風穴

次回以降に詳細を執筆することになるが、当時の米国の石油事情を大雑把に説明しよう。

ロックフェラーが石油事業に参入を決意した時代は、小規模の石油会社が乱立する揺籃期。効率的な体制を構築しても、採掘した原油はもとより、石油製品の市況が乱高下し、痛手を被る業者は少なくなかった。ロックフェラーは、生産調整で何とか市況を制御できないかと考えていた。そのために実行に移したのが市場を支配する独占体の形成である。

石油事業は、大まかにいえば採掘部門、精製部門、販売部門から成り立っている。便宜的に採掘部門を上流（アップストリーム）、販売部門を下流（ダウンストリーム）と呼ぶ。アップストリームは、現在では、メジャー（国際石油資本）のドル箱となっているが、当時は違った。雨後の竹の子のように業者が乱立。採掘に成功しても激しい勢いで噴き出す原油を止めることはできず、市場に供給するしかない。制御し、生産をコントロールするのはかなり難しかった。このため中流と下流部門のいずれかの支配を目指した。だから中小のライバル企業の買収工作を積極果敢に進めたのである。

買収に使ったのが自社株式の供与である。現金が必要ないからである。多くの企業を傘下に収め、株の持ち合いなどを通じて強固な集合体を形成。州を超えた業務が禁止されていたためトラストの採用によってこれを突破した。

独占体の構築には、考えられるありとあらゆる手法を駆使した。几帳面で抜け目のないロックフェラーの才覚は、ここでいかに発揮された。設立した石油精製工場の効率性は群を抜いていた。その意味での経営手腕は高く評価できよう。事実、アイダもトラストによるロックフェラーの組織体を高く評価、「カトリック教会あるいは、ナポレオン時代の政府のように完全に中央集権化されていた」などと綴っている。⁽¹³⁾

その神髄が、1911 年に米最高裁から独禁法違反で断罪されることになるトラストである。

ロックフェラーは、トラストによって政府の追求をすり抜け、スタンダードオイルは空前絶後の独占体に膨れ上がった。具体的には、反社会的、悪辣、理不尽、無慈悲、反道徳的、犯罪的ともいえる賄賂、買収、リベート、脅迫、騙し、ねつ造など考えられる、ありとあらゆる戦術を駆使。アイダの記事には、ライバル企業を脅迫、潰し続けた経営の内実が赤裸々に綴られていた。

市場支配が可能な独占体を形成すれば、市況のコントロールは容易となる。本来、安いはずの石油製品の値段を吊り上げ、それを消費者などの需要家に提供し、巨額の利益を計上している。こうした指摘は、全米のスタンダードオイル批判の火に油を注いだ。

当時の有力政治家で、後の大統領セオドア・ルーズベルトはターベルの記事に仰天したようだ。大統領就任後、ルーズベルトは、この犯罪的な行為を糾弾するため指示を出す。政府が反トラスト法適用に向かって大きく踏み出す画期となる。

裁判が提起され、歴史的な判決につながった。米最高裁が下したロックフェラー帝国の解体である。米シャーマン法違反が認定され、約40社に分割された。

解体後のスタンダードオイル・オブ・ニュージャージー（後のエクソン）、スタンダードオイル・オブ・ニューヨーク（同モービル）、スタンダードオイル・オブ・カリフォルニア（同ソーカル）などの市場支配力は一向に衰えず、むしろ海外で力を伸ばし、国際石油資本（メジャー）との異名を取るようにまで拡大。ブリティッシュ・ペトロリアム（BP）、シェルなどの7社とともに世界の石油市場を支配する悪名高い企業群、セブンシスターズと名付けられた。

資源ナショナリズムが台頭し、石油輸出国機構（OPEC）が本格的に力を発揮する1970年代までメジャーは世界の石油市場を半ば牛耳っていた。1973年の石油危機は、まさに産油国のカルテル組織 OPEC が市場支配力をセブンシスターズから取り戻す契機でもあった。

以降、石油市場に激動の時代が到来。1980年代末からの合従連衡を経て、1999年にエクソンとモービルが統合、旧スタンダードオイルの亡霊ともいえる組織が誕生したのである。名実ともにスタンダードオイルの後継であるエクソンモービルは、その1社だけでも2008年の売上高が4773億ドル、利益は452億ドルと世界最大級を誇る超ガリバー企業。今なお絶大な力を世界経済の中で保有している。

アイダが特筆されるのは、秘密主義の帝国の内情を初めてつまびらかに告発したことである。一連の記事がなかったとしたら、行政は動かなかったかもしれない。反トラスト法適用に向けリーダーシップを発揮したルーズベルトさえもコトの重大性に気がつかず、歴史的な判決による帝国の解体はなかったのかもしれない。世論も盛り上がりも欠け、仮にあったとしてもかなり遅れたものとなったであろう。解体というドラスチックな判決にまで至ったかどうか。

ルーズベルトを含め当時の米有力政治家がロックフェラーからの多額の政治献金の供与を受け入れていたことは既に触れた。それを考慮すると、企業の厚い秘密主義の壁をアイダのペンが風穴を開けたとも表現できよう。

ウォーターゲート事件の報道をきっかけに知られるようになった調査報道は、日本でも、未公開株の譲渡で濡れ手に粟の政財官界の総汚染を発掘したリクルート事件、北海道、高知県警

に代表される裏金事件などで知られるようになった。それよりはるか前の米国で1人の女性ジャーナリストが巨大独占に挑み、超特大の優れた実績を残していたことは、いくら誇張しても誇張し過ぎることのない功績であろう。

vi) 20世紀のベスト5

ここに1冊の本がある。タイトルは、「The History of the Standard Oil Company (スタンダードオイルの歴史)」。表紙に、100年前に米国で、初めて石油の採掘に成功した当時のオイルクリークの石油採掘の木製油井が林立する風景の写真をあしらっている。

中身は、アイダが当時の雑誌「マクルアズ」に連載した論文をまとめたものである。実は、この本は、驚くべきことに1999年にニューヨーク・タイムズ紙が選んだ20世紀を代表する米国の著作ベスト100の第5位に選ばれているのである。約1世紀前に出た本であるにも関わらず、いかに米国の知識人がこの本の中身に驚嘆し、今なお記憶に刻み込まれていることが分かる。同時に、その記事が当時の米国を如何に震撼させたかも理解できよう。

ロックフェラー伝の中で批判的に取り上げている作家のチャウナウでさえアイダの記事については「スタンダードオイルについてこれまで書かれた中で最も感銘を与え続けている」と評価している。⁽¹⁴⁾

一代で巨大帝国を築いたJ・D・ロックフェラーは、トラストに対する批判が高まった1895年に事業から名目上、身を引いた。実際には、実質的な社長としてその後も経営の采配を振るい続け、完全に引退したのは1911年である。当時は、所得税などないから巨額の稼ぎがそっくりそのまま資産として残った。これは、当時の金額で25億ドルと試算されている。⁽¹⁵⁾現在の価値で再評価すればいくらになるのだろうか。見当もつかない。

「批判をかわすためにも社会貢献に資産の一部を振り向けるべき」との周囲のアドバイスに難色を示しながらもしぶしぶ従い、5000万ドルの株式を抛出し財団を設立した。引退直前の1910年のことである。

創業者の引退後は、長男のジョン・D・ロックフェラー2世が経営に関与し続けた。だが、商才のないことを自覚したのか、間もなく経営からは手を引き、慈善事業家として活躍した。

スタンダードオイルと縁を切り、社会貢献事業に徹したこともあってその後のロックフェラー一家に対する一般の非難は急速に弱まる。反比例して慈善運動家、篤志家としての評価が次第に高まった。約100年後の今では、ロックフェラーのかつての悪行、つまり反社会的な行為に手を染めて石油帝国を構築、さらに王座に君臨し、巨万の富を築いたという事実さえ忘れ去られようとしている。

教会の日曜学校の教師を務めるほど信心深かったジョン・D・ロックフェラーは、社会貢献には消極的だったとされている。だが、日本では、野口英世が黄熱病の研究に没頭したロックフェラー医学研究所、あるいは莫大な資金を投じて創設したシカゴ大学などが知られているというのは皮肉なものである。

vii) マックレイカー

アイダは、その連載記事が掲載された雑誌がスキャンダル暴露を専門とする社会派の雑誌「マクラズ (McClure's)」だったため軽く見られていた節がある。アイダ自身も、スキャンダル記事を専門とするその一派、マックレイカー (Muckraker) に分類されるのを嫌がっていた。なぜだろう。

Muckraker を英和辞典で紐解くと、確かに好ましい日本語訳は、記載されていない。原義である Muckrake が「堆肥をかき集める熊手」、Muckraker は、転じて「醜聞を暴く人、(特に) 新聞記者たち」という具合である。⁽¹⁶⁾

国内でいえば、休刊となつてしばらく経過するが有名人のスキャンダル掲載が専門の「噂の真相」などのライターに当たるのだろうか。1960年代に週刊誌のトップを飾る記事を書くフリーランスのジャーナリストは「トップ屋」と呼ばれた。その程度のニュアンスか。

ただし、アイダにとっては、決してそうではなかった。反社会的な活動で一般の労働者、消費者に甚大な被害をもたらしているのはトラストの巨大帝国。その内情を暴くのがジャーナリストの最大の務めという意識だったのだろう。実際、マックレイカーらは、社会の改革運動との使命感をもっていたようだ。その先頭に立ったのが、サムエル・マクラアが発行する雑誌「マクラズ」であった。サムエルは、「最大最新の呼び物はトラスト」「人々は知りたがっている」と語っていた。⁽¹⁷⁾

こうした社会の改革を目指すジャーナリスト達を“マックレイカー”と命名したのは、スタンダードオイル訴訟に向けて調査開始の判断を下した大統領ルーズベルトだった。1906年のことである。⁽¹⁸⁾ 唾棄する存在と考えていたのだろうか。

Judith & William Serrein 「Muckraking」によると、ルーズベルトは、マックレイカーは、「荒探しばかりしており、星 (star) をみていない」⁽¹⁹⁾ と批判していた。もっとも、後に、この発言は訂正したようである。

それは、1890年から1900年にかけての米国の当時の報道姿勢が、特に新聞は、イエロージャーナリズムが主流だったことと関連があろう。現在の日本ではあまり考えられないことであるが、当時は、販売が最優先で、事実無根、ねつ造、虚偽報道もなんのその、センセーショナルな紙面が横行していた。現在の欧米の新聞には一部その名残がある。

事実、ピューリッツァ賞の生みの親として有名なジョセフ・ピューリッツァのワールド紙やウィリアム・R・ハースト経営のNYモーニング・ジャーナルの強引なねつ造報道が、世論、議会、大統領を動かし、1898年の米西戦争開戦へ路線を敷いたとの見方もある。

イエロージャーナリズムには一般大衆も辟易していたし、大統領に就いたルーズベルトも同様であったと推測できる。マックレイカー、さらには雑誌のマクラズもこの延長上にある、とみていたのであろう。

実際、ルーズベルト自身も当時の新聞のセンセーショナルリズムの餌食になっていた。パナマ運河の買収の関連でピューリッツァのワールド紙が、これにルーズベルトが絡むとする資金疑惑の暴露記事を掲載していた。確かに、同買収に絡み巨額の資金が用途不明になってはいた。

ただし、ルーズベルトの着服はなかったというのが最近の一致した見解である。ルーズベルトはワールド紙を告訴したのだが、最終的にはうやむやに終わったのである。

最近のアイダ研究は米ミズリー大教授による、2008年の著作が最右翼といえるだろう。米ジャーナリズムに調査報道に深くかかわるステイブ・ウェインバーグ教授が「Taking on the Trust — How Ida Tarbell brought down John D. Rockefeller and Standard Oil (トラストとの攻防—アイダ・ターベルはいかにしてジョン・ロックフェラーとスタンダードオイルを倒したか) (W. W. Norton Company) を出版した。評判は、概して悪くない。米ウォールストリートジャーナル紙は、「富の力による示威運動は絶対ではなく、腐敗を暴く報道の力は無視できなかった」との論評を寄せている。

それでは、これから本論文の主目的であるアイダ・ターベルの研究をスタートさせよう。流れとしては①アイダの人となり②スタンダードオイルとの闘い③著作「スタンダードオイルの歴史」④独禁法判決⑤ターベル後のスタンダードオイル⑥取材手法⑦トラスト分割後のアイダ⑦アイダのリンカーン、ナポレオン論—など。これらを順次取り上げていきたい。

2. アイダ・ターベル史

i) 幼年時代

出身のアレガニー大学がその功績を称えて創設したホームページ「Ida Tarbell Home Page」(<http://tarbell.allegheeny.edu/index.html>) や「Ida Tarbell — Pioneer Investigative Reporter」(Barbara A. Somervill 著 Morgan Reynolds Publishers. Inc.)、「Ida Tarbell — Portrait of a Muckraker」(Kathleen Brady 著 University of Pittsburg Press)などを基に、その一生に迫ってみよう。

ターベルが生まれたのは、今から1世紀半前の1857年11月5日。当時の世界の世相、どんな時代だったのだろう。世界史の概略を考察してみよう。

欧州の英国は、ヴィクトリア女王(1837—1901年)が統治、権益を世界に拡大。繁栄の絶頂期にあった。つい6年前の1851年には、世界の物産を紹介する万国博覧会をロンドンで開催、当時としては、誰もが目を見張る水晶宮(クリスタルパレス)とよばれる全面ガラス張りの建物を建設。産業革命によって成し遂げた数々の近代工業の成果を全世界に誇示した。

欧州大陸のフランスでは、ナポレオン3世による第2帝政が既に始まっていた。国内産業を育成する一方で、クリミア戦争、イタリア統一戦争などに出兵し、積極的な対外政策を展開。中国では、英船籍を主張する船の中国人乗組員が海賊容疑で逮捕されるというアロー号事件が発生、英仏が出兵。アロー号戦争(第2次アヘン戦争)を機に、列強の中国進出が始まった。

日本はというと、53年のペリー来航を受け、アイダの生まれた57年に幕府が初代米総領事ハリスと下田条約を締結した。日本は開国に向け、まっしぐらに歩み始める。世界は激動の時代に突入していた。

では、米国はどうだったのか。1776年の13州による独立宣言を経て、「マニフェスト・デ

ステニイー（明白なる天命）」の下、進めていた西部開拓は一段落。その一方で、国内問題が先鋭化する。連邦のあり方や奴隷制をめぐる南部と北部の対立が激化。アイダが5歳になった1862年にリンカーン大統領が誕生。翌年南北戦争に突入する。そんな内戦の時代であった。

生まれたのは、東部ペンシルベニア州ハッチハロー。母、エセルの実家だった。父フランクリンは、農業を始めるため家族を残し、単身、中部のアイオワ州に旅立っていた。時は、経済恐慌の真っただ中。預金していた銀行の倒産で父は無一文となり、足止めを食らう。戻って来た時にはアイダはすでに1歳半となっていた。

母の実家が農家のアイダは、この間、アヒル、ニワトリ、羊などの家畜に囲まれて育った。帰って来た父は、仕事探しに早速、精を出す。ここは、俗にオイルクリーク（油の小川）と呼ばれる、油が自然に湧き出す地区であった。太古の時代から原住民たちはこれをすくい、ランプや薬に使用していたのである。

59年8月下旬、全米を驚かせるビッグニュースがペンシルベニア州タイタスビル発で全世界に流れる。エドウィン・ドレイクが石油採掘に成功するという人類史上初の快挙をやった。以降、米国は世界最大級の油の生産地となり、現在は中東勢の後塵を拝してはいるもののそれが続いている。

「(採掘成功の) ニュースは、燎原の火のように拡大、油を掘削するためのサイト確保のため狂ったように大勢の人々が殺到。タイタスビルの人口は、一晩で数倍に膨れ上がり、土地の値段は、短期間で急激に上昇」。一夜にして49年のカリフォルニアのゴールドラッシュのような現象が生じたのである。⁽²⁰⁾

では、殺到した業者がすべて油井を掘り当て億万長者になったのか。そうではなかった。ゴールドラッシュと同様に極めてリスクなビジネスでもあった。

採掘に成功しても、市場への供給がドカンと増えれば、需要と供給の原則で、値段は当然下落する。農業事業従事者に「豊作貧乏」という言葉があるように、掘りあてることが必ずしも収入増にはつながらなかったのである。

こうした中でオイルビジネスに着手したロックフェラーは、採掘に伴うリスクを痛感。うち石油精製部門が安全なビジネスであることを見抜いた。採掘は一定程度に歯止めを掛け、アップストリーム部門以外への注力を決断する。ここが洞察力の凄さであり、抜きん出た経営の才覚でもあった。

協道に逸れたがアイダ一家はどうだったのか。オイルクリークには、俄か作りを含めて石油採掘業者が急増、採掘に成功した油井から大量の原油が噴出していた。これは、木製の樽に詰められた。いくつあっても足りない。大工職人としても腕に自信のあったアイダの父のフランクリンは、樽作りで活躍する。樽ビジネスはたちまち繁盛し、ターベル一家は、父が経営する工場の近くに拠を構えた。

もっとも、幼いアイダにとって、オイルクリークでの生活は息苦しいものだったようだ。ひとりの遠出を禁じられていたからである。

なぜなら、油井のやぐらが林立するこの地区はあまりにも危険が多すぎたからである。油の

溜まった水たまり、廃坑になった油井の跡。落ち込んだら二度と這い上がれない深い穴などが無数にあった。転落すれば、命に保証はない。

こんなこともあった。自宅の隣で採掘していた知り合いの井戸から油が噴出、その随伴ガスが一瞬にして引火。大爆発に見舞われた。多数の犠牲者が出たのはもちろんである。幼少期のアイダの生活は、まさに危険と背中合わせであった。事故による焼け焦げた死体の姿は、記憶に深く刻み込まれ、アイダは、これで「一生、うなされることになった」。(21)

1861年、アイダの暮らすオイルクリークから遥か離れた中央政府内で大変革が起きようとしていた。リンカーンが大統領就任後、南部の州が米連合国 (Confederation States of America) を結成、この結果、南北戦争が勃発したのである。激しい戦闘の末、65年4月9日に南軍は降伏、平和が訪れる。だが、その5日後に狙撃され、翌日の4月15日未明、リンカーンの死亡が確認された。

オイルクリークの住民には、別の意味での変化が起きていた。こちらの方がはるかに身近でかつ深刻、アイダのその後の人生に深く関わる出来事であった。原油運搬用の樽が木製から鉄へと変わっていた。これは、父の失職を意味した。木製の樽を作ってもはや飛ぶような売れ行きを期待できなくなったのである。

失意の一家は、オイルクリークの中心地タイタスビルに転居、父フランクリンは、今度は、石油の採掘に乗り出した。自前の油井を持つためである。

ドレイクが初めて油の採掘に成功したその地は、当時1万人程度の人口を誇っていた。地方都市としては大きい方である。現在、800万人弱のニューヨーク市の人口が当時100万人超だった頃である。タイタスビルは、教会、銀行、学校、警察、ローカル新聞など各種施設が完備された近代都市でもあった。当時としては珍しい歩道や下水道、ガス灯もあり、ターベル一家は、週に最低2回は教会に行くという敬虔な家庭でもあった。

浮き沈みの激しいオイルクリークでは採掘成功で一夜にして長者になる幸運な山師もいれば、鉦脈に到達できずに破産に追い込まれるケースも少なくなかった。

メインストリート沿いに6万ドルで建てられたホテルが廃業し、アイダの父はわずか100分の1の600ドルで購入、これが一家の家となったこともあった。

こうした乱高下の激しい石油ビジネスに心を痛めていたのは、タイタスビルの住人だけではなかった。先般簡単に触れたが、目先の利く若き経営者ジョン・D・ロックフェラーも危機感を抱いていた。石油産業の不安定さは経営にとって非効率と考えたロックフェラーは、オイルビジネス全体の支配という野望を持つに至っていた。うち、比較的経営の安定している石油精製部門を支配下に置くことでこれが可能と結論付けた。

手始めに石油地帯の石油精製所の支配下に置くことを目指す。そのための南部開発会社 (South Improvement Company) を1871年に設立、短期間でその地域の大部分を支配に成功した。

ロックフェラーらの発案によるこのSICという会社は実は、とんだ曲者の会社で、裏で数々の不正を働いていたのである。後述するこの論文の章の中の「スタンダードオイルとの闘い」「スタンダードオイルの歴史」の項目でこの実態を詳しく取り上げるので、ここでは、簡単に

説明することにとどめよう。

支配力の強化のため SIC は、鉄道会社などとの間で密約を結んだ。鉄道は、スタンダード系以外の独立系業者の輸送運賃を値上げし、その見返りに鉄道はロックフェラー側にリベートを支払っていた。SIC に加入しないアイダの父の経営するような独立系企業に対する割高の運賃の一部がリベートに化けたわけである。独立系業者が輸送すれば輸送した分だけ、SIC に支払われるリベートが増えた。とんでもない話である。

結果的に、割高となる独立系企業の製品は、スタンダードオイル系企業に太刀打ちできず、廃業に追い込まれ、あるいは傘下入りを余儀なくされた。これらは、鉄道会社と組んだ犯罪的なカルテル行為、まさに独占禁止法違反である。秘密裏に実行に移されていた。

幼いアイダは、父親フランクリンを含めて次々に傘下入りする弱小企業を自分の目で見て、巨大独占、ロックフェラーに対する敵愾心を募らせたことは想像に難くない。この瞬間、ロックフェラーは、アイダの生涯を通じて「最大の敵となった」のである。⁽²²⁾ (続)

注釈

- (1) Ron Chernow 「Titan」(Vintage books) 445 頁
- (2) Daniel Yergin 「The Prize」(A touchstone books) 101 頁
- (3) 「日本新聞通史」(春原昭彦著、現代ジャーナリズム出版) 64、78、110 頁
- (4) 「American experience - the Rockefellers - Ida Tarbell」
(http://www.pbs.org/wgbh/amex/rockefellers/peopleevents/p_tarbell.html)
- (5) 「Ida Tarbell」(http://en.wikipedia.org/wiki/Ida_M._Tarbell)
- (6) 日本石油社長室「石油便覧」(石油春秋社) 27 頁
- (7) 安部悦生など「アメリカ経営史」(有斐閣ブックス) 81 頁
- (8) Daniel Yergin 「The Prize」(A touchstone books) 100 頁
- (9) 古賀純一郎「メディア激震」248 頁
- (10) Daniel Yergin 「The Prize」(A touchstone books) 104 - 105 頁
- (11) Barbara A. Somervill 「Ida Tarbell」(Morgan Reynolds Publishers, Inc.) 60 頁
- (12) ジュールズ・エイバルズ「ロックフェラー」(河出書房新社) 253 - 264 頁
- (13) Ida Tarbell 「The History of the Standard Oil Company」(Dover Publications, Inc.) 196 - 208 頁
- (14) Ron Chernow 「Titan」(Vintage books) 443 頁
- (15) ジュールズ・エイバルズ「ロックフェラー」(河出書房新社) 349 頁
- (16) 「新英和大辞典」研究社 1387 - 1388 頁
- (17) Daniel Yergin 「The Prize」(A touchstone books) 101 頁
- (18) John M. Harrison & Harry H. Stein 「Muckraking」(The Pennsylvania university press) 1、7 頁
- (19) Judith & William Serrein 「Muckraking - The journalism that changed America」(The new press) 10 頁
- (20) Daniel Yergin 「The Prize」(A touchstone books) 28 頁
- (21) Barbara A. Somervill 「Ida Tarbell Pioneer Investigative Reporter」14 頁
- (22) Barbara A. Somervill 「Ida Tarbell Pioneer Investigative Reporter」17 頁